

■大明見浅間神社 部分祭(昭和35年頃)
宮下吉秋氏提供

富士吉田あれこれ

現在のように満で年齢を数えるのではなく、昔のように数えて年を数える場合には、その区切りはいつなのでしょう。『年取り』ということばがあります。『広辞苑』を引いてみると、二番目に「除夜または部分のこと」とあります。通常は、正月を迎えて年を一歳重ねていくと考えられていますが、当地では部分を加齢の区切りとする習

やくばら
年取りと厄払い

慣があったようです。多くの場合、年取りといえは部分をさし、年齢の数え方も、部分を境に「年を取る」ことになったようです。もっとも、正月が現在の暦法に変わる以前の旧暦の時代は、正月と部分が同一時期の行事として重複しておこなわれていたので、あえて分別する必要がなかったのかもしれませんが。しかし、明治初期の暦法改正にしたがって、その後の習俗に多少の混乱が出てきたようです。その一つが、漠然としたもので、年齢の区切りを正月とするのか部分とするのかでしょう。当地では除夜を年取りとするのはもちろんですが、部分を年

取りとする考え方も根強く残っています。除夜、大晦日と同様に、ごった煮と年取り魚をおかず白米飯と味噌汁で夕御飯を食べる家が少なくありません。

ところで、^{やくばら}年取りを迎えるものが来るべき年に被ると考えられる災難を、神仏に祈るなどして年のはじめにあらかじめ払い落としてしまおうとするのが厄払いの考え方でしょう。厄年は、数え年で男は25・42・61歳、女は19・33・61歳とされ、その年には災厄にあわないように忌み慎んで過ごしてきました。市内では小正月に節刀^{ふしな}打つ子どもたちや若い衆仲間が厄払いに回ることが盛んですが、なんといっても地域の氏神さんで実施される部分の厄払いが中心を占める行事でしょう。女の19歳は満で数えると17歳で、高校2年生にあたります。市域では、女子高生がこの日に休

みを取って厄払いに出向くことが少なくなく、事実上の休みにしている学校もあります。女子高生は、ほかの厄年の人たちと同じように、餅柄のアンサンブルの着物を新調して、地域の友だちと連れだって氏神さんへ出かけ、厄払いの豆撒きに加わります。山附きの地域では、それがとりわけ盛んで、神社だけでなく、かつては年豆やミカンを自分の家の二階から集まってきた近所の人に撒いたり、道路を通行する車の上に沿道の人たちに撒いたりもしました。現在はそれらを袋に入れて近所や親戚に配りたりしています。

科学が発達した現在にあっても、見通すことのできない人の一生に関して、慎み深く暮らすことは大切なことでしょう。当地においても、おもに部分を区切りとする厄年と厄払いに対する観念がこのように根強く残っているのは興味深いことです。



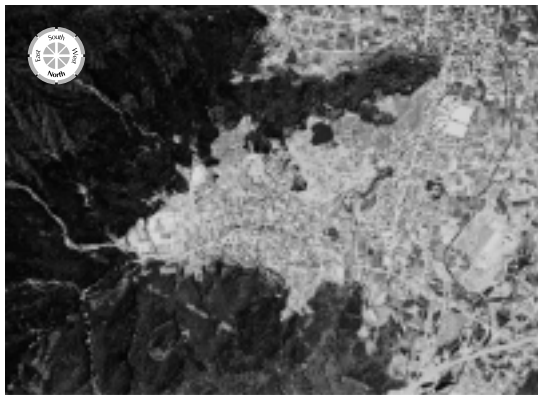
■大明見浅間神社 部分祭(平成13年)

明見の歴史と文化(後)

はじめに

富士吉田市の東部に位置し、道志山地（杓子山）の山裾に沿って展開する明見地区は、背戸山を境として北に小明見、南に大明見の2つの地区から構成されています。今回は、この明見地区が立地する地形・地質の特徴や大明見地区の史跡などについて紹介しました。

今回のレポートはその後編として、小明見地区の成立とその後の展開について紹介します。



■小明見航空写真

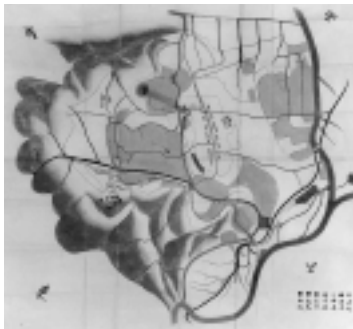
小明見村の成立

小明見村は、背戸山を境として大明見村のほぼ北側に位置し、小佐野川をはさんで東側の地区を古屋組、西側の地区を新田組と呼んでいました。また古屋組は、背戸山の山裾に位置する小原（古原）と大沢川沿いの向原という二つの地区から構成されていました。

当初、小明見村の集落は小原から発生したようで、その後向原にも人が住むようになったといわれます。向原という地名の由来もこの当時の向原が辺り一面の原っぱで、小原から見て「向こうの方にある原」ということから「向原」というようになったといわれています。また、向原でもっとも古く家が建て

られたのは万年寺のすぐ下辺りで、そこから大沢川沿いに上流へと広がっていったといえます。

寛文9年（1669）の検地の頃まで小明見村はこの二集落で構成されていましたが、その後、古屋の一部と明見湖周辺の人々によって小佐野川と桂川の間の岩石丸尾が開発され、貞享3年（1686）には新田検地をうけて、その地を新田組と呼ぶようになりました。新田組は、南北に道を通しその両側に屋敷割をしており、大明見村と同様に江戸期の典型的な村のつくりとなっていました。これにより小明見村は、小原・向原で構成する古屋組と丸尾を開発した新田組の二組で構成されるようになりました。



■小明村絵図

明見湖

関東各地から富士山へ参詣する人々は、甲州街道から大月橋東詰を起点とする富士道へと向かいます。この富士道は、近世までは谷村から小沼を通して小明見へと続いており、明見湖は富士参詣の人々が登山前に身を清める精進場の一つとなっていました。

文化11年(1814)に著された『甲斐国志』に「古屋ノ西南二町許リ山足二湖水アリ 明見湖ト云フ」村ノ

南山ノ際ニアリ 長サ百間余 幅八十間許リ 富士八湖ノ一ナリ」とあり、近世富士講の祖といわれる長谷川角行が水行をおこなった富士八湖(富士五湖・四尾連湖・明見湖・駿河の浮島沼、後に泉端に変わる)とよばれる修行場の一つにもなっていました。また、明見湖はかつて「阿曾海」「浅海」などとよばれ、それが訛ってアスミとなり、現在の「明見」という地名になったともいわれています。

現在明見湖は、湖一面にハスが生



■明見湖

長老尾遺跡

向原地区から杓子山に向かう山道の途中に、真真沢の砂防堰堤に隣接した平坦地があります。この場所は、御長老、長老ヶ尾、新田様などと呼ばれており、西方寺の前身となることがあった場所だといえます。

この平坦地は上下2段になっていますが、上段には二間×三間の御堂があり、その手前側に付属施設があったと考えられています。現在、上段の正面奥には「開基祖師神」の石碑があって、その台座には二体の石仏が祀られています。一体は耳が大きく彫れ頭部には髪髻の痕跡がありおおむね16世紀頃の如

来立像と思われます。もう一体は頭部のみの石仏で、観音像と思われます。

また、西方寺に所蔵されている二基の板碑は、長老尾から出土したと伝えられていますが、これは大正12年(1923)の関東大震災の時、炭焼沢の尾根斜面が崩落し、上流の谷から土砂が押し流されて長老尾一帯が土砂で埋め尽くされたため、その土砂を取り除く作業中に発見されたといえます。この二基の板碑は、弘長元年(1261)と延文6年(1361)の銘をもつもので、寺の言い伝えによると耀月祖師神に関わるものとされています。



■長老尾遺跡



■石造物(如来立像)

山寺遺跡

この遺跡は小明見字山寺にあった、上ノ山の南麓、標高760m程の緩斜面に位置しています。この山寺という地名の由来は、現在小明見新田にある西方寺の旧跡と伝えられているため、当初長老尾にあった寺が後にこの場所へ移されたといえます。

山寺遺跡からは、縄文時代早期の茅山式土器や平安時代の坏・甕などが採集され、炉の跡も確認さ

れています。また、地中で「溝」と呼ばれている入川用水の「溝上」には平坦地があって祀堂の跡だと考えられています。

後世の開墾から寺院跡らしい痕跡をうかがうことができませんが、現在地藏菩薩像が一基と香炉に用いられたと思われる石鉢が残されています。この地藏菩薩像は、方形の切石の上に座していますが、周辺に連弁模様の石片が散乱していることから、かつては蓮座に座していたものと考えられます。



■山寺遺跡

三宝山万年寺

万年寺は浄土宗智恩院末の寺院で、堂谷山の南側尾根の山腰に位置しています。

かつては、小明見字峰岸にあり万蔵寺と称したといわれます。宝永3年(1706)の万年寺由緒書によると「当寺開基誰共知不申候、大永3年壬午焼失仕候申候、依之当寺開基之由緒知不申候」とあり、万蔵寺は大永2年(1522)の火災で焼失したため古い記録類を失ったことから、開基やその由緒など詳しいことはわからないといわれます。

その後、天正18年(1590)に寺を

峰岸から庫裏村(現万年寺の建っている尾根の麓あたり)へ移し、浄土宗に改めました。そして寛永年間(1624～44)に再び火災にあったことから現在の場所を切り開いて寺を再建し、寺号も三宝山万年寺と改めました。

万年寺には、音色が優れていることで知られる釣鐘があり、市の文化財に指定されています。この梵鐘は、正徳4年(1714)に当時の郡内領主秋元恒馬守の家臣だった飯塚重登が、亡き父親の供養のために江戸の鋳物師に鋳造させ万年寺に寄進したものです。



■万年寺鐘樓

引接山西方寺

西方寺は浄土宗智恩院末の寺院で、阿弥陀如来を本尊としています。開基は耀月祖底禅師で、創建の頃には小明見字長老尾にあり臨済宗妙心寺末の寺院でした。慶応4年(1868)の西方寺由緒書によると、祖底禅師は新田義貞の五男で、寺の名は方山寺だったといわれます。

『甲斐国志』の西方寺の項には「重屋珍書 貴室禅師ノ時 永禄元年戊午十月十九日寺ヲ山之寺ト云フ地ニ移ス」とあり、長老尾にあった西方寺の前身の寺は、永禄元年(1558)に山之寺(字山寺)に移転されました。

その後、寺は廃絶していましたが、武藤一族が山岸という場所に寺を建て、武藤氏出身の心善大善和尚を招いて再興しました。文禄元年(1592)には智恩院に属して浄土宗に改宗、寺号も西方寺と改めました。新田に移転して以降の享保13年(1728)には、富士山の雪代

によって諸堂が破壊され、翌年には火災で焼失したため、一時西方寺末寺の長寿院に仮住していましたが、元文元年(1736)に現在地へ寺を再建しました。西方寺には、創

建当時寺のあった長老尾から出土した二基の板碑(石造りの卒塔婆)が所蔵されており、県の文化財(考古資料)に指定されています。



■西方寺

明見の歴史と文化(後)

富士浅間神社

富士浅間神社は小見地区の氏神で、天津彦々火瓊杵命と木花開耶姫命を祭神として祀っています。

慶応4年(1868)の由緒書に「社造立之年数由緒相知不申候」とあって、神社の創建などの詳しい由緒については伝わっていませんが、宝永

(1704～11)頃まで浅間明神と呼ばれ、祭礼は4月初申の日と9月19日の年2回だったといわれています。また、享保年中(1716～36)からは富士大明神(富士権現)と呼ぶようになり、1月15日、3月18日、4月1日、9月19日の年4回祭礼を行っていました。現在では、4月15日の春祭と10月19日の秋祭の年2回となっています。

富士浅間神社の祭礼には太々神楽や獅子神楽が奉納されています。太々神楽は神話の岩戸開きをモチーフとして12の舞いから構成されています。獅子神楽は神社に舞いを奉納した後、神輿の前を淨めるため神輿の先導として地区を回ります。これらの神楽は市の無形民俗文化財に指定されています。



■ 富士浅間神社

おわりに

今回のレポートでは、前編・後編の2回にわたって明見地区の地形や地質の特徴、村落が形成された過程、また地区の歴史と深い関わりを持つ史跡や文化財について紹介しました。

このように、明見地区1つをとりあげても地域独自の歴史や文化があり、そこで培われた数多くの文化遺産が存在します。

博物館では、こうした身近な歴

史や文化を紹介することで、各地域に残された史跡などの価値をそこに暮らす皆さんに再認識していただき、これから先も変わることなく後世へと伝えていっていただければと考えております。

今回紹介できたのは、明見地区の歩んだ歴史のほんの一部に過ぎませんが、このレポートを通して地域の身近な歴史を見直していただき、さらに郷土全体の歴史に対してより一層の興味と関心を深めていただければ幸いです。

おもな資料および参考文献

- 『甲斐国志』大日地誌体系、44～48
- 『甲斐国社記・寺記』第1巻～第4巻
- 『富士古田史』史料編第1巻自然・考古、民俗編第1巻・第2巻
- 『古原の民俗』富士古田市民俗調査報告書
- 『向原の民俗』(上・下)
- 富士古田市民俗調査報告書

【担当学芸員 齊藤 智子】



企画展・写真展・博物館講座

企画展

巡回展『山梨の遺跡展』

平成12年6月23日(金)～7月16日(日)

山梨県では、毎年数多くの遺跡が発掘調査されています。この企画展は、平成11年度に調査された県内各地の遺跡から出土した遺物を写真や解説を加えて詳しく紹介し、現在のもっとも新しい研究の成果を報告しています。富士北麓地域は発掘調査が少なく、考古資料に触れる機会の少ない市民の皆さんにとって、こうした遺跡の調査状況や出土した遺物を見ることは、考古学を理解するよい機会になったのではないのでしょうか。



『縄文土器作り教室作品展』

平成12年8月22日(火)～8月27日(日)

博物館講座「縄文土器作り教室」に参加していただいた皆さんの作品と縄文土器ができるまでの過程を写真とパネルで紹介しました。

今回は大人の部・小人の部合わせて35点の作品を展示しましたが、どの作品もモデルとなった縄文土器に違わぬ出来栄で、参加者のひとりひとりの熱意が伝わってくる力作ばかりでした。



写真展

『富士山～その風土と参道～』

平成12年4月28日(金)～6月11日(日)

市内在住の写真家飯島志津氏が昭和48年(1973)に刊行した写真集『富士山～その風土と参道～』に掲載された写真を中心に紹介しました。これらの作品は、江戸時代に関東一円で隆盛を極めた富士講の道者が江戸から富士山頂へ至るまでに辿った道筋を訪ねて撮影したもので、往時の面影を残す街道の様子や富士信仰にかかわる史跡などが懐旧の思いを込め映し出されています。



『御山参詣の手引き』

～登山案内図を中心に～

平成12年7月25日(火)～9月30日(土)

富士山に人が登るようになったのは平安時代の末のことと、人々は信仰のために富士山頂を目指しました。こうした信仰登山は、江戸時代の富士講によって隆盛をきわめ、富士山へ参詣する人々を対象に、各登山道の様子を描いた案内図が刊行されるようになりました。今回の企画展では、この「登山案内図」を比較検討することで、信仰の山としての富士山を人々がどのように認識していたのかを考察しました。

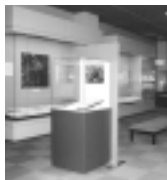


『御師の家伝薬と薬園の成立』

平成13年1月20日(土)～3月15日(木)

富士山の裾野には数多くの薬用植物が自生し、古くから民間薬として親しまれてきました。登山として信仰されてきた富士山に自生する薬草には、その薬効に加えて富士の神徳も備わった「霊薬」と考えられてきました。

今回の企画展では、吉田の御師と富士山の薬草の関わりについて紹介し、御師が薬草や家伝薬を活用することで宗教者としての地位を確立していた過程を明らかにしました。



『富士五湖風物誌』

平成12年10月17日(火)～11月30日(木)

昭和55年(1980)に写真集「樹海」によって刊行された写真集『富士五湖風物誌』から地域の民俗行事などを撮影した写真24点を紹介しました。この写真集は、富士北麓の風景や民俗行事を3年の歳月をかけて撮影したもので、20年を経た現在では映像記録としてもきわめて貴重なものとなっています。当時の懐かしい風景を見ることで、地域の移り変わりをあらためて実感していただけたのではないのでしょうか。



博物館講座

『勝山記を読む、そして歩く』

第1回 平成12年5月20日(土)

第2回 平成12年6月24日(土)

第3回 平成12年7月15日(土)

第4回 平成12年8月19日(土)

この講座は、富士北麓地域に残る貴重な中世史料である『勝山記』(妙法寺記)の解説を通して、そこに記録された内容を理解するとともに、富士北麓地域の中世史を学習しました。

また、この講座の最終回には、小室浅間神社や松尾神社などの『勝山記』の舞台となった市域の史跡を実際に散策しました。史料を解説し、史跡をめぐること、郷土の歴史を実感としてより一層理解していただけたのではないのでしょうか。



■講義の様子



■松尾神社境内

『市内上郷地の史跡を訪ねて』

平成12年10月15日(日)

私たちの身近なところにも貴重な文化遺産やそれを育んだ豊かな自然環境があることを再認識していただくため、市内各地に残された史跡や文化財を徒歩でめぐり、各地域ごとに培われた歴史を学ぶ講座を開催しています。

今回は、富士吉田市の北部、西桂町と隣接する上郷地区を散策しました。参加者は、講師の詳しい説明を聞きながら約7kmの道のりを歩き、身近な地域の歴史について熱心に学習していました。



■今郷



■福昌寺境内

『縄文土器作り教室』

大人の部

第1回 平成12年6月4日(日)

第2回 平成12年7月2日(日)

第3回 平成12年8月20日(日)

この体験学習は、縄文時代の生活や技術を学んでいただくための講座で、市内から出土した縄文土器をモデルに、当時と同じ手法で土器製作をおこないました。まず、土器の材料となる粘土作りから始め、土器の成形と文様付け、磨き、野焼きまでを全4回の行程で実施しました。真夏の炎天下の中での野焼きは想像以上に大変な作業でしたが、参加者全員が一生涯懸命作業した甲斐もあって、どの作品も割れることなくすばらしい出来栄となりました。

小人の部

第1回 平成12年7月30日(日)

第2回 平成12年8月6日(日)

第3回 平成12年8月20日(日)



■土器の文様付け
上/小人の部・下/大人の部

『縄文式魚釣り』

平成12年10月22日(日)

この講座は、縄文時代の生活を体験として理解してもらうため、縄文時代に使われた釣針と同様に骨を石で磨いて作成し、その釣針を使って実際に魚釣りをおこないました。

そして今回からは、釣りだけでなく、釣り上げた魚の試食も試みました。魚は黒曜石を使って自分でさばき、竹串に刺して焚き火で焼きました。

参加した子供たちは、自分で釣った魚や縄文土器で煮たスープを試食して、いっしょに縄文時代の人々の生活に溶け込んでいました。



■魚釣りに挑戦



■釣り上げた魚を試食

博物館からのお知らせ

平成12年度寄託・寄贈資料

平成12年度に博物館へ寄託・寄贈していただいた資料を紹介します。ご協力ありがとうございました。

寄託資料

- ・北口本宮富士浅間神社「絵馬」他.....計 8 点

寄贈資料

- ・権正 多「日本刀」.....計 2 点
- ・田辺 四郎「神札」他.....計 4 点
- ・岡田 博「布マネキ」.....計 2 点
- ・井田藤行清山「布マネキ」.....計 2 点
- ・馬場 武二「拓本」.....計 4 点
- ・小野 俊彦「手機織機」他.....計 75 点
- ・田辺 重徳「書籍」他.....計 197 点
- ・武藤 重枝「神棚」.....計 1 点
- ・羽田 尚敏「ゲタ」他.....計 4 点
- ・滝口美智代「軍服」他.....計 5 点
- ・宮下 啓「シロモク」他.....計 2 点
- ・河村すず子「糸秤」他.....計 4 点
- ・渡辺 博友「組紐台」他.....計 8 点
- ・小明見連合自治会「サイレン」.....計 1 点 [順不同、敬称略]



■神札



■組紐台

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとわれています。

富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間 / 午前9:30 ~ 午後5:00 (午後4:30迄入館可)

休 館 日 / 月曜日(祝日を除く) 祝日の翌日(日曜

・祝日を除く) 12月28日 ~ 翌1月3日

観 覧 料 / 大 人 300円(団体 240円) 団体割引は
小中高生 150円(団体 120円) 20名以上に適用

交通案内 / ●中央自動車道河口湖ICより車で10分

●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面
バス15分、サンパークふじ下車



MARUBI 編集後記

1月末に降った大雪で辛い目にあった方は多いと思います。博物館エリアもこの雪ですっぽり覆われてしまい、その日からというものの毎日毎日職員総出で雪かきをしました。エリアが広いにもかかわらず、重機が入れない場所が多いので、永と化した雪の撤去も人の手だけが頼りの作業でした。その甲斐あって(?)今では一人前にツルハシを握るようになり、辛い氷割りも快感になりつつあります。きっとこの№16が発行される頃には、一段とくましく肉体になっていることでしょう。(SA)